

武田信玄と『孫子の兵法』

考

坂 本 德 一

拙著『武田信玄孫子の戦法』（新人物往来社刊）をまとめる必要に迫られて『孫子の兵法』『六韜・三略』を著わした戦前、戦後の本を捜して読む機会を得た。その中で武田信玄の戦略、外交、民政などの軌跡に合わせて書くうえで昭和十年七月一日発行の「兵書全集第一巻」の公田連太郎訳、大場彌平講（解説）の『孫子の兵法』（中央公論社刊）が最も適切で大いに参考になった。

紀元前五百年ほど前の古代中国の兵書である『孫子の兵法』は戦

争論であり、勝つためには手段を選ばない非人道的な戦争の本質を掘り下げる必勝法である。逆に言えば「勝算のない戦争は絶対にしつらわない」と戒め、できれば相手国と戦わずして屈伏できれば「地形編」「九地編」「火攻編」「用間編」である。

「始計第一」の冒頭に

〔原文〕 孫子曰。兵者國之大事。死生之地。存亡之道。不レ

可レ不レ察也。

〔訳〕

孫子曰。わく、兵は國の大事にして、死生の地、存亡の道なり。察せざる可からざるなり。

と孫子の戦争論の基本ともいべき事柄を第一に記し、人間の生存と戦争の不可欠な関係を暗示して國のために戦う將兵は、國家の存亡を決める重要なカギをにぎっていることを強調している。戦時中は「富國強兵」を國の柱とし、大君の赤子として神格化し、侵略戦の先兵として利用した。人間の本能に巢食う征服欲、闘争心を煽りたてて國策に組み入れたかつての大日本帝国の戦時思想には「個の自由」を抹殺した非社会的な欠陥と人間輕視の惡弊をさらけ出している。

最古の兵法といわれる『孫子の兵法』の著者について「孫子といふ兵法者は実在しなかつた」という説、孫武の単独説、孫子・孫武の合作説など『甲陽軍鑑』同様、編者については未だに謎につつまれている。

が、漢字一つ一つに重要な重みがあって、凝縮された迫力がある。十三編に分かれている項目は、「始計編」「作戦編」「謀攻編」「軍形編」「兵勢編」「虚実編」「軍爭編」「九變編」「行軍編」「地形編」「九地編」「火攻編」「用間編」である。

てしまつた感がする。

戦時中、軍部は『孫子の兵法』を分析し、軍国主義の教科書として『戦わずして勝つ』の外交戦略を用い、武力に過信しての

戦略行為のみを活用したこと間に間違いがあつたようだ。

昭和十年発行の『孫子の兵法』（中央公論社刊）の解説を担当している大場彌平も古今東西の戦争の勝利、敗因の実例をあげて項目別に列記しているが、勝った、負けた、に終始している点に古さを感じる。もともと『孫子の兵法』は、中国の国内戦に主力をおいて書かれている。

非合法な必勝哲学

応仁の乱を起点とする戦国乱世の日本の国内戦が熾烈をきわめていたところにこそ『孫子の兵法』は身近な兵法書として活用されたのである。

武田信玄の戦法、戦略を分析すると、服従を誓つた甲斐国内および占領地の先方衆には寛容で、たとえ敵国の将と雖も、信玄に忠誠を誓つた将に対しても、武田譜代の諸将同様に優遇している。だが、徹底抗戦の敵に対しては大量殺りくも辞せず、徹底的に粉碎していく事柄をとつても、まさに『孫子の兵法』の本質をわきまえた唯一人の戦国大名ではなかつただろうか。

信玄の苛酷な戦法は『妙法寺記』『高白斎記』『甲陽軍鑑』などに記録されている通りである。特に天文十六年（一五四七）八月の信濃佐久郡の志賀城（佐久市）の攻略では城主の笠原清繁をはじめ將兵悉く討ち取り、女子供、老人にいたるまで生け捕つて、その場で競売した旨を『妙法寺記』は克明に記録している。同じく天文二

十三年（一五五四）八月の信濃下伊那の神之峰城の攻防戦で捕えた城主の知久頼元父子三人と重臣八人は甲斐に護送し、河口湖に浮ぶ鵜ノ島（当時は大原ノ嶋と呼ぶ）に監禁した。

『妙法寺記』天文廿三年の条に「此年十月ニ信濃ノ知久殿親子三

人以上八人、大原ノ嶋へ流サレ玉フ。大原地下衆三人番ニテ守り申シ候。此年冬雪不降。（中略）」とあり、翌廿四年の条に「五月廿

八日、信州知久殿与四郎殿、舟津ニテ生害被成候」と記されている。

信玄の戦略、意思に背く者あらば、たとえ肉親の者であつても、断固処斷する強い姿勢は、永禄十年（一五六七）十月十九日、三十歳で自害して果てた長男の太郎義信への処置をみても明らかである。また自らも『甲州法度』に背いたときは容赦なく罰せよ、と最後の

条文に書き加えている事例をみても法治国家体制への熱い信念と戦法の精神を顯示した証である。

孫子の兵法の神髓

信玄と『孫子の兵法』と言えば、軍争編の中から引用した

疾如風徐如林侵掠如火不動如山

の十四文字の武田の旗じるしを想起するが、確かに信玄が、この十四文字を武田の旌旗として採用した理由は理解できる。この十四文字の中には戦略、攻略の神髓とも言うべき孫子の理念が集約されているからである。

『孫子の兵法』を幼時に学んだという信玄は全十三編の兵法のすべてを暗記していたものと思われる。

必勝の信念を持ち、晴信二十二歳にして甲斐の指導者として大軍を擁して信濃の諫訪攻めを敢行していらい、順風満帆の勝ちいくさ

の連続で、慎重な晴信も「過信」が募り、北信濃の葛尾城主・村上

義清との二度の戦いで敗れている。天文十七年（一五四八）二月の上田原（上田市）の合戦と同十九年秋の戸石城の攻防戦である。

信玄が絶対不敗の戦略を遂行しはじめたのは三十歳以降である。

永禄四年（一五六一）九月十日の信濃の川中島での第四回にわたる越軍との激突も、甲・越両軍ともに「絶対に勝てる」という確信があつたから両軍とも全力を傾注して戦つたのである。両軍とも、どちらかに必勝の確信がなかつたら第四回の激突は起つて得なかつたと思うし、身内、重臣、それに多数の将兵の命が助かつたかもしれない。

『孫子の兵法』（謀攻編）に記されている「必勝五つの条件」の頭に「故曰。知レ彼知レ己。百勝不レ殆」とある。訓読みにすると「ゆえにいわく、彼を知り、おのれを知らば、百戦あやうからず」である。「負けるいくさなら最初からやらないほうがよい」という考え方方に徹し、余裕と十分な準備期間を費やして「絶対に勝てる」という自信に裏付けられて出馬している。

『孫子の兵法』（作戦編）に「勝つこと久しければ銳を挫く」とある。同じく謀攻編に「退くも勝ち」と示唆している。

恵林寺の信玄公遺訓の「軍勝五分を以つて上と為す」とゆとりのある思想も快川紹喜和尚と膝を交えて語り合える信玄晚期の対戦略の考え方であったのではないかと推察する。

全信濃席捲のあと、関東攻略、駿河攻略にしても物心ともに大きな犠牲を伴う城攻めも決して無理押しをしていない。

一度で陥ちなかつたら、二度、三度と敵の心理を衝いた陽動作戦で、敵も味方も最小限度のパワーと兵力で最大効果をあらわす必勝

法を選んで領土の拡大と治安を維持している。

『孫子の兵法』（謀攻編）に「軍勝五分」の論調で「敵国を打ち破らず、我方も兵卒を損傷せず敵国を征服するを上とし、敵国に攻め入つて敵を打ち破るはその次とする。（中略）、これゆえ百たび戦つて百たび勝つても善の善なる者に非らざるなり。戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり」と教えている。つまり戦わずして勝つには相手国を物心両面で納得させ、道理を解いて対等に理解し合うことである。

信玄は『孫子の兵法』の「兵勢」「軍争」「火攻」といった荒ら事の戦法を極力避けて「謀攻」「九変（外交攻略）」「用間（スペイ戰術）」にこだわつて甲・信・駿・西上野・美濃・三河へと肉迫し、領土の拡大と同時に特産の経済の交流、適材の人事の交流、民政事業を進めている。

信玄三十九歳で剃髪し、徳栄軒信玄の法名に変えたのも、殺生の明け暮れから遠ざかりたいという悲願と乱世の日本を和平に導きたいと願う仏教徒の浄土の道を選んだのだと思う。

宣教師ルイス・フロイスの言葉を借りれば「信玄はつねに法衣をまとい、六百人の僧侶を従えて…」の出兵であり、仏法をもつて上下万民の安寧を計らうとしたに違いない。

幼いころの信玄に禪の道を喰し、『孫子の兵法』を教え導いたのは西郡相沢村（甲西町鮎沢）の長禅寺住持の岐秀元伯であるとする史料は見つからず、いまのところ口伝に過ぎないが、信玄成長の過程に師と仰いだ僧は岐秀のみならず遣明使として三度も渡明している策彦周良、惟高妙安、希菴玄密、快川紹喜といった天下に名だたる名僧、高僧から禪学、倫理、築堤法、戦略、兵法などを学んだも

のと推定される。

また武田の家臣団の中にも戦略・兵法に精通した軍学者が数多くいたことは合議制による評定の図式をみても明らかである。

武田流の孫子の兵法

もともと武田の騎馬軍団は農民組織で構成されている。平時にあっては農耕に従事し、一朝事あるときは武具、軍馬、武器、糧抹を整えて出兵した。夏と秋の農繁期に阻まれる農兵の現実をカバーしたのが占領地の先方衆である。治国安民を基幹とする信玄は『孫子の兵法』（作戦編）が示した「糧は敵に依る」の解釈をもって、食糧は現地調達するのを常識とした。むかしも今も七十五%を山林とする甲斐（山梨）は耕作面積は狭く、天災（おもに風水害）と飢えとの苛酷な歴史の繰り返しがあった。

信虎の政権失脚の背景には、天文五年以来五年も続いた天災による、餓死者無限の苦しみがあった。天文十年（一五四一）六月の時点で信虎を駿府へ追放しなかつたとすれば甲斐に内乱が起き、武田一族は存亡の瀬に立たされていたであろう。

諏訪頼重・頼高兄弟を理由なく自害させ、非合法な手段で武田晴信麾下の武田勢が諏訪へ攻め込み、電光石火の勢いで南信濃、伊那地方を席捲、さらに佐久から北信濃への侵略の道をたどったのは信濃国は豊かな穀倉地帯であったからである。したがつて信濃侵略は、米戦争と言われる所以である。

信虎と信玄の父子の戦略に、さほどの違いはないが、占領政策については雲泥の差があつた。信玄の占領政策は驚嘆に価するほどの鮮やかさである。

物資の輸送についても強奪ではなく、物の交換を行ひ形で経済の交流を図つた。

永禄十一年（一五六八）の暮れから始まつた駿河攻略も、亡き今川義元の嫡男氏真の塙停めが原因である。義元時代、甲斐および信濃、西上野に輸送する塙、海産物の大半は駿河・相模経由であった。塙の道を絶たれたら内陸のすべての住民の死活に関わる重大事である。

掛川城を境界に駿河は武田、遠江は徳川家康と境を決めて武田。徳川の連合軍が一斉に烽起して駿、遠二カ国の今川領に攻め込んだのである。武田の駿河攻めは明らかに「塙戦争」であった。

相手国の特産をねらつての経済戦争とみられる信玄の戦略のなかで出色と評価されるのは金山の開ざくである。軍備に限らず甲州金を経済、人事、新技术開発などの振興、交流策に投じていてある。

『孫子の兵法』（軍形編）に「勝ちを生ずる計算の基礎」として次の五つの原則が述べられている。

- 一つ 部署配置（適切な人材の配置）
- 二つ 豊富な物資の確保と交流
- 三つ 軍団の兵力と兵数の増強
- 四つ 情況判断に必要な適格な情報の蒐集
- 五つ 平時、戦時を問わず、これらを正確に点検することを怠らぬこと

正確に点検するという意のなかには、被占領地を含めての万民の

不平不満に謙虚に耳を傾け、是正すべきものは、ためらうことなく改善する姿勢が為政者になければ万民を動かせない、と信玄は理論の上でも十分にわきまえていたようだ。

信玄最大の作戦となつた京をめざしての西上作戦は、武田の軍船五十八艘を加えて甲・信・相・駿・上五ヶ国の東軍を統率して元龜三年（一五七二）十月三日、信玄出陣と前後して三軍団に分かれて開始されている。

『孫子の兵法』（作戦編）に「兵を鈍らすべからず」とあり、約三万五千といわれる武田連合軍の士氣を鼓舞し、『孫子の兵法』

（軍形編）の最後の条にある「優勢は決河の如し」とし、一氣呵成の勢いに乗じて京都へ攻めのぼる計画だったに違いない。

だが、生者必滅の大自然の原理には抗しきれず志半ばにして五十歳で斃れた。

「武田信玄と孫子の兵法」の一体化は、誌面の都合上この項だけにとどめておくが、拳々服膺した『孫子』との対話と実践を奨励した信玄の戦略、施政を探究するには、まだまだ研究する時間が欲しいと思う。

（市史編さん専門委員）